

A 語句の意味と読み

(1) 読み＝ろうしつ／意味＝せまくて粗末な家・部屋。「陋」はみずばらしい・いやしいの意。／題名の『陋室銘』と同じ語。作者が自分の住まいをへりくだって言っている

(2) 読み＝かんばし（「馨し」で「かんばし」）／意味＝よい香りが高い。ここでは、徳（人格）がすぐれていて、その香りが遠くまで届くようだ、ということ。／★「馨」は遠くまでよい香りが広がること。徳のたとえに使う。なお、この部分を「惟だ吾が徳の馨しきのみ」と読む教科書もあるので、お使いの教科書の読みに合わせる

(3) 読み＝たいこん／意味＝こけのあと。こけが生えているあと。／人の出入りが少なく、静かな住まいであることを表している

(4) 読み＝こうじゅ／意味＝学識の深いすぐれた学者。大学者。／「鴻」は大きい・すぐれたの意。「儒」は学者

(5) 読み＝はくてい／意味＝官位のない、学問や教養のない人。／★⑧「鴻儒」と対になる語。対句の中で意味も正反対になる

(6) 読み＝しちく／意味＝弦楽器と管楽器。転じて、音楽・楽器の音。／「絲」＝弦楽器の糸、「竹」＝笛などの管楽器。「糸竹」と書く本もある

(7) 読み＝あんとか／意味＝役所の公文書・書類。「形」＝からだ・身体。／わずらわしい役所づとめの象徴。「形を勞す」＝体を疲れさせる

B 句法

(8) 「(山の値打ち)は高いことにあるのではない」という否定。山が高いかどうかで尊さが決まるのではない、という意味。／続く「水は深きに在らず」とまったく同じ形。「AはBに在らず」＝「Aの値打ちはBにあるのではない」

(9) 「Aすれば則ちB」の形で、順接の条件を表す。「Aならば、それで(その結果)Bとなる」の意。ここは「仙人がいれば、それで名高くなる」。／★「則」は「すなはち」と読む。前が条件、あとがその結果になる

(10) 限定。「惟だ～のみ」で「ただ～だけだ」の意。ここは「ただ私(＝作者自身)の徳だけがかくわしく香っている」ということ。／★「唯・惟・只・但」はどれも「ただ～のみ」と読む限定の字。なお、この部分を「惟だ吾が徳の馨しきのみ」と読む教科書もあるので、お使いの教科書の読みに合わせる

(11) 可能を表し、「～することができる」の意。ここは「(この家では)素朴な琴を弾き、貴い経典を読むことができる」となる。／「素琴」＝飾り気のない素朴な琴、「金経」＝金泥で書かれた貴い経典。教科書によっては「～してよい・～するのがよい」と許容の意で訳すこともあるので、お使いの教科書に合わせる

(12) 主語と述語のあいだに置かれて、主語を示す「～が」にあたる働きをしている。「絲竹が耳を乱すこと」というひとまとまりを作り、それを「無し」が打ち消している。(書き下しでは「の」と読む)／「無A之B」＝「AのBする無し」＝「AがBすることはない」。⑫「案牘の形を勞(らう)する無し」もまったく同じ形

(13) 反語。「どうして粗末だということがあるのか、いや、ありはしない」の意で、陋しさを強く打ち消している(＝「少しも粗末ではない」という強い否定)。肯定形(有)の反語は強い否定、否定形(無・不)の反語は強い肯定になる。／★答えを求める疑問ではなく、逆の内容を強く言い切る言い方。教科書によっては「何の陋しきことか之れ有らん」と読むので、お使いの教科書の読みに合わせる

(14) ふつうの語順は「有何陋」。目的語である「何陋」を動詞「有」の前に出し、その目印として「之」を置いた倒置(賓語前置)の形になっている。「之」そのものは訳さない。／★疑問詞をふくむ目的語は動詞の前に出やすい。書き下し・反語の意味・この語順の三つをセットで問われる

C 主語・指す内容

(15) 作者が今住んでいる、せまく粗末な住まい(陋室)。「冒頭の山・水のたとえを受けて、話がいよいよ自分の家に移るところ

(16) 「諸葛」＝諸葛亮(孔明)。「子雲」＝揚雄(あざなを子雲という)。蜀の出身で、漢の時代の学者・文人。／どちらも質素な住まいで知られた人物。諸葛亮は南陽で畑を耕し草ぶきの家に住んでいた

(17) 孔子の言葉。この文章では、作者の住む陋室(せまく粗末な住まい)が、少しも卑しくはないと言われている。／直前の「孔子云はく」が手がかり。古人の言葉を借りて、自分の主張に重みをもたせている

D 口語訳

(18) 山は高いから尊いのではない、仙人が住んでいれば、それで名高くなる。水は深いから尊いのではない、龍がすんでいれば、それで霊妙になる。／「在らず」の否定と「則ち」の条件を、そのまま訳に出すこと

(19) この家はせまく粗末な部屋ではあるが、ただ私の徳だけがかくわしく香っている(それで十分なのだ)。／★この一文が作品全体の主旨句。「～なるも」は「～ではあるが」と逆接に訳す

(20) こけのあととは石段にはい上がって緑に色づき、草の色はすだれに映って青々としている。／「苔痕」⇔「草色」、「階」⇔「簾」、「緑」⇔「青」が対応する対句になっている

(21) にぎやかな楽器の音が耳をわずらわせることもなく、役所の文書が体を疲れさせることもない。／俗事にわずらわされない、静かな暮らしを述べている

E 内容・記述

(22) 山は高さで、水は深さで値打ちが決まるのではなく、仙人や龍がいるかどうかで決まる、という例をあげ、それになぞらえて「家も、立派さではなく住む人の徳で決まる」という主題を導き出すための比喻（たとえ）として置かれている。／山・水＝陋室、仙・龍＝吾が徳、と対応している。ここを比喻と見ぬけるかが第一の関門

(23) 語の組み立ても意味も対応する「対句」。訪ねてくるのは学識の深い学者ばかりで、教養のない俗人はいない、という対比によって、陋室での交わりが高尚で清らかであることを示している。／「談笑」⇔「往来」、「有り」⇔「無し」、「鴻儒」⇔「白丁」がきれいに対応する。本文はこの対句を重ねて調子をつくっている

(24) 諸葛亮の草ぶきの家も揚雄のあずまやも質素な住まいだったが、そこに住んだ人物がすぐれていたために、りっぱなものとして語りつがれている。自分の陋室もそれと同じで、住む人の徳ゆえに卑しくはないのだと、名高い人の例を借りて示すため。／直後の孔子の言葉へつなぐ橋渡しになっている

(25) 住まいが粗末でも、住む人の徳が高ければ少しも卑しくはないということ。(三十四字)／★答えの軸は「家の立派さ」ではなく「住む人の徳」。貧しさに安んじて道を楽しむ生き方を述べている

F 文学史・故事・思想

(26) 作者＝劉禹錫（りゅううしゃく）。王朝＝唐（中唐）。「銘」は、もともと器物や石に刻んで自分を戒めたり功德をたたえたりする文体で、対句を重ね、句末で韻をふんだ、短くひきしまった文章。／政治改革に加わって失敗し、地方へ左遷されていた時期の作とされる

(27) 三顧の礼／目上の人が礼をつくして、くり返し人を訪ね、協力を求めること。／劉備が諸葛亮の草ぶきの家を三度訪ねた話から。諸葛亮自身も『出師表』に「三たび臣を草廬の中に顧み」と書いている

(28) 『論語』（子罕篇）。孔子が東方の九夷の地に住みたいと言ったとき、「そこは陋（いや）しいでしょう」と言われて、「君子が住むのなら、どうして陋しいということがあろうか」と答えた言葉。／結びに古人の言葉を引いて自分の主張に重みをもたせるのは、漢文でよく使われる書き方

【現代語訳（全文）】

山は高いから尊いのではない、仙人が住んでいれば、それで名高くなる。水は深いから尊いのではない、龍がすんでいれば、それで靈妙になる。この家はせまく粗末な部屋ではあるが、ただ私の徳だけがかぐわしく香っている（それで十分なのだ）。

こけのあとは石段にはい上がって緑に色づき、草の色はすだれに映って青々としている。談笑する相手には学識の深い大学者がいて、行き来する者に教養のない俗人はいない。ここでは飾り気のない素朴な琴を弾き、貴い経典をひもとくことができる。にぎやかな楽器の音が耳をわずらわせることもなく、役所の文書が体を疲れさせることもない。

（この家は）南陽にあった諸葛孔明のいおり、西蜀にあった揚子雲（揚雄）のあずまや（と同じようなもの）だ。孔子は言った、「（君子が住むのなら）どうして粗末だなどということがあろうか、いや、ありはしない」と。